

「月」で結婚式の日取りを決める習俗

波田 尚大

『名栗の民俗』(下)に「秋の仕事が終了した 11 月にゴシュウギ(結婚式)が多く行われた」という伝承が記録されています。今月の「That's きつとす」ではこのことに焦点を当て、「月」で結婚式の日取りを決める習俗をご紹介します。



昭和 11(1936)年結婚披露宴記念写真

人生儀礼の中でも重要なイベントである結婚式の日取りについて、「大安吉日」の「よいお日柄」の「日」が選択されることは広く知られています。それと同じように、特定の「月」を選択することで縁起を担ぐことが行われていました。西洋の概念ですが 6 月の「ジュンブライド」などはご存じでしょう。このような習俗が日本においても存在しているのです。

江戸時代の文化年間(1804-1817)に屋代弘賢という人物が、アンケート形式での民俗調査を日本全国で行いました。弘賢が各地へと送ったアンケート＝「諸国風俗問状」の中に、1 月から 11 月にかけて「此月を好み用ひ、又此月をいみさく

る事如何」、つまり「この月に何かをすることを好み、または忌み避ける風習が存在しますか」という問が設けられています。

この回答を見ると越後國長岡領(現新潟県長岡市)、三河國吉田領(現愛知県豊橋市)、大和國高取領(現奈良県高取町)、若狭國小濱領(現福井県小浜市)、肥後國天草郡(現熊本県天草市)において 11 月が「祝い月」などと呼ばれ、結婚式に好み用いられていたことがわかります。他の月については 1 月、9 月が 11 月と同様で、3 月、7 月、10 月は避けられていました。

『名栗の歴史』(上)によると、旧上名栗村において文化 2(1805)年から明治 2(1869)年までの 64 年の間、結婚式は 2 月、1 月が飛びぬけて多く、4 月、11 月…と続き、5 月、10 月がとても少なく、7 月に至っては 0 件だったことがわかります。11 月が 1 番多い月ではありませんが、弘賢の調査結果と同傾向を示す月が多く存在していることがわかります。

近隣の秩父市では神無月の 10 月、盆の 7 月、彼岸の 3 月は避けると言った伝承が報告されています。こうした習俗については地域差があり、また時代によって変化していきますが、名栗地区で 11 月に結婚式が多く行われていたと伝承されていたのは、仕事の忙しくない時を選ぶという実利的な理由だけでなく、「月」によって縁起を担ぐ意図があったのかもしれませんが。

【参考文献】

制作・編集 さいたま民俗文化研究所『名栗の民俗』(下) 飯能市教育委員会 平成 20(2008)年 3 月

編集 飯能市名栗村史編集委員会『名栗の歴史』(上) 飯能市教育委員会 平成 20(2008)年 3 月

波田 尚大「婚礼月伝承の研究」『國學院大學大学院紀要—文学研究科—』第 47 輯 平成 28(2016)年 3 月